
レッドアップル

菜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レッドアップル

【Nコード】

N2548E

【作者名】

菜花

【あらすじ】

日曜日に訪れた依頼人。そして依頼人と向かったパーティーで事件が！？オリキャラあり。

第一話　～依頼～

～五月十一日・日曜日～

何時ものように、コナンは事務所のソファで小説をよんでいた。そんな平凡な時間に事務所のチャイムがなった。

「はい！」

いつものように蘭が扉を開ける。

「助けて下さい！！」

いきなりのSOSに三人は驚きその人をみた。小五郎はそく脱衣場にいき服を着替えその人の前にあらわれた。

「お嬢さん慌ててどうしましたか？」

今までの雰囲気とちがう小五郎に二人はジト目で見、女性には驚いていた。

「ほー。殺人予告ですな」

「はい」

（『今新しく作る会社から手をひけ。でなければ娘の命はない。娘の命が尽きる日五月十二日』か……娘ってことはこの人か？）
コナンの思考がフル回転を始めた。机においてある犯行文をよみ陰

しい顔つき変わった。

「この娘というのは？」

「私です。申し送れました。私西条くるみといいます」

「西条ってあの財閥の？」

「そうよ。良く知ってるわねボウヤ」

「うん！こう言う事大好きなんだ」

子供スマイルをくるみにみせまた険しい顔つきにかわった。

「それで新しく作られる会社とは？」

「はい。レッドアップルジュエリー株式会社です。もうすぐ開催前のパーティーがあるので」

「もしや、五月十二日、明日ということですか」

「はい。それでパーティーに来ていただけたら嬉しいのですが……」

「分かりました。お嬢さんをしっかり守りましょう！」

高笑いする小五郎に呆れるコナンの脳裏に嫌な予感が過った。

「では三人分の招待状です。あとお二方の名前は？」

「あ。すみません私毛利蘭といいます。それから江戸川コナン君です。」

「よろしく」

コナンと蘭はくるみと握手をした。くるみは招待状を渡し事務所を

出ていった。

（まさかな。守るだけだよな。それ以上ねえよな）

コナンは嫌な予感を無理矢理消した。

第一話〜依頼〜（後書き）

夜な夜な新作更新……。

なかなか眠れずに小説かいてたんです。

そして題名が思い付かずにあんな題名に……センスゼロ。
気に入ったかた最後までお付き合いを。

では

第二話く似合う？・レッドアップル

く五月十一日く

三人は高層ビルにくるみと一緒に入っていった。

「すごい！ 林檎の形にカットされているんですね」

「はい。そうなんですよ。蘭さんにはこっというのが似合いますよ」

くるみが手にとったのはとてもシンプルな林檎のペンダントだった。林檎に天使の羽をつけたデザインでとてもちいさかった。

「私に宝石なんて似合いませんよ」

蘭は手を降ってことわった。

「そんなことないわ。女性ですものきつと似合いますよ」

蘭は少し照れた顔になりつつそのペンダントをつけてもらった。

「蘭ねえちゃんすっごく似合うよ！今日のドレスにぴったりだよ！

」！

コナンはニコニコしながら少しはしゃいだ。

「ありがとうコナン君」

「コナン君が大きくなったら蘭さんのプレゼントにいかが？」

くるみはクスツと笑いながらコナンに目線を合わすためしゃがんだ。

「え！ それは……」

コナンはまるで林檎のように真っ赤な顔になった。

「ふふ。コナン君林檎になってるわよ。さあ皆さん会場にいきましょう」

エレベーターで上がり会場に向かった。会場では、たくさんの人が集まっていた。

「これはこれはくるみ様おまちして降りました」

「こんにちは高橋さん」

「紹介します。父の秘書をします高橋良^{じょう}さんです」

「あ、どうも探偵の毛利小五郎です」

「どうして探偵がいるのです？」

「私のボディガードです。それから娘の毛利蘭さんと江戸川コナン君です」

「「こんにちは」」

「そうでしたか。ではごゆっくり」

高橋は一礼をして立ち去った。

第二話〜似合う?・レッドアップル〜（後書き）

またまた夜中に更新！

今だから更新できる明日から夜中には更新できないな。

さてさてまだ平和！レッドアップル君もなにもないまま時間が過ぎています！

照れるレッドアップル君がかわいいな（笑）タイトル遊んでいます（笑）

その前にわかりますよね？

レッドアップルが誰か。ここまで読んでくださった方々は！

では！

第三話　脅迫状

「パーティー会場」

パーティーは着々と進められていた。

「あ、くるみ！」

「ママ！　どうしたの？」

「くるみ宛に手紙がきてたのよ。はい」

その手紙は真っ白な封筒に“西条くるみ”とかいてあるだけだった。

「ありがとう！」

「後でパパのところに行きなさいよ。ママ先にいつとくから」

スタスタ早歩きに立ち去っていった。

「さっきの人は私の母です。名前は西条秋。あ、さっきの手紙なんなんだろう」

恐る恐るあけてみたくるみの顔がかたまりワナワナ震え始めた。

「も、毛利さん……」

その異様な光景に小五郎は手紙をすぐにみた。

「パーティーの開始はお前の終わり。か……大丈夫この俺がくるみさんを守りぬきます」

「あ、ありがとうございます」

くるみは深々とお礼をした。

「ねえ、それよりこのことくるみおねえちゃんのお父さんに言わなくていいの？」

「んなの、お前にいわれなくてもわあってるよ！ー！」

「いつてー！ー！」

小五郎は拳でコナンの頭をなぐった。

「お父さん何もそこまでする必要ないじゃない」

「コイツが口出しするからだ！　ではいきましょう。くるみさん」

「え、ええ」

くるみもコナンを気にしながら小五郎の後についていった。

「もー！　コナン君に手荒なんだから！ー！」

まだ痛そうに涙目になってるコナンに手を差しのべた。

「大丈夫？コナン君。あ、いこ！　お父さんたちと離れたら危ないから」

「う、うん」

しゃがんでいた蘭がたち上がり手を繋ぎ小五郎のいるところまで小

走り方向かった。

第三話　脅迫状（後書き）

三話です！

コナンの風物詩になってる小五郎がコナンをポコ平和だな

もう時期事件が。

殺人じゃないので。

では

第四話　暗闇で

父親のところに向かう途中、会場が停電となった。
ざわめく会場でキラリと光る凶器をコナンは発見した。

「危ない!!」

コナンはくるみを押した。くるみとコナンはその場に倒れこんだ。
数分後会場の電気が普及し、二人は起き上がり床をみた。床にはナイフが落ちていた。

「大丈夫ですか？くるみさん！」

真っ先に駆け寄ったのは蘭だった。

「ええ。コナン君が助けてくれたわ」

くるみはニッコリコナンにほほえんだ。

「ありがとうコナン君」

「え？　べ、別にたいしたことしてないよ……はは」

少し照れながら目をそらすコナンにクスツと笑った。

「それよりくるみさん早く参りましょう」

小五郎は先ほどのナイフをハンカチに包み先を急いだ。
くるみや小五郎たちは父親のいる部屋に入った。

「パパ」

「くるみ！　大丈夫だったか？」　ノックと同時に入ったくるみをみ

て少々おどろいていたが直ぐ我にかえり娘を心配した顔になった。

「ええ。大丈夫」

「そつか。電気はもうついたみたいだからパーティーはそのまま」

「だめ！パパ、パーティーは中止にしてほしいの！」

ほっとしたのはつかの間、くるみの慌ただし態度に先ほどよりおどろいた顔になった。

「その前に一つきいていいか？」

「え？何パパ？」

「後ろの方がたは？」

「そうだわ、この方は探偵の毛利小五郎さん娘の蘭さんと江戸川コナン君」

「こちらはパパの西条孝夫」

紹介されみんなはお辞儀をした。

「そつか。くるみ探偵に以来したんだね」

「ごめんパパ。でもこわくて……さっき停電の中襲われたの……」

くるみの声は少し震えていた。父親の孝夫はだれよりも大きな目をしていて。

「そ、それでくるみ大丈夫だったのか!？」

「大丈夫……コナン君が守ってくれたから」

孝夫の目はますます大きくなりコナンを見た。コナンは真剣そのものの顔で孝夫をみた。

「その話についてお話してくれませんか？」

小五郎がくるみのよこに歩いてきた。

「まず、脅迫状について警察には？」

「いえ。よくあることで伝える必要はない」

孝夫はきつぱりいい小五郎を睨んだ。

「しかしですなあ。こうしてくるみさんが狙われたのですよ?」

孝夫は無言のまま目をそらした。

「孝夫さん!!」

小五郎は孝夫をしっかりと睨んだ。

「パパお願い!」

くるみも必死で頭を下げた。しかし孝夫は承知の言葉を言わずに部屋から出ていった。

その後ろで二人の男が礼をして孝夫後についた。

「先ほどのお二人は？」

「あ、はい。パパのボーディガードの土山様と安西様です」

「ボーディガードですかあ。また凄いですなあ」

「はい、財閥の一・二を争う父親です」

ボーディガードの説明も終わり辺りが静まりかえった。

「おじさん、トイレいつてくるね」

コナンが出ていこうとする手をくるみが掴んだ。

「え？」

「コナン君道しらないでしょ？ 私がつれていくわ」

コナンの腕をしっかりと握る手は少しだけ震えて力が入っていた。

「くるみさん。あなたは狙われてる身、こんなボウズにと居ますと」

「大丈夫です。トイレに行くだけですから！ もしものがあればパパと警察をお願いします」

「ですが！」

小五郎が引き留めるのも聞かず、くるみはコナンの手を引いてその部屋から出ていった。

第四話〜暗闇で〜（後書き）

事件発生です！

これから

どうなるかな……

しかし題名未だ思い付かない！！

ネーミングセンス0ですね

では

詰まらないかもしれませんが評価感想よろしければお願いします！

第五話　犯人登場

コナンとくるみはトイレに向かう廊下を歩いていた。

「さっきはごめんね……強く握りしめちゃたって」

「それはいいけど、どうして僕と一緒にきたの？」

子供顔から一変したコナンの鋭い目がくるみを見た。くるみは少しびくついて黙りこんだ。

「……あそこに居るのが嫌だったから」

小さな声でコナンがギリギリ聞こえるような感じだった。

「大人は信用できない……パパは私を守ろうとしなかった脅迫状が届いてもパパは警察にもいわなかった……毛利さんもそう……ナイフで狙われても私を守ってくれなかった守ってくれたのはコナン君だけだった……大人の側にいっても守ってくれない。ならコナン君といた方が大丈夫な気がしたの」

くるみとコナンの目が合った。先ほどよりも断然鋭い目付きになったコナンからまた目を反らした。

「自分の命くらい自分で守りなよ」

「え……？」

「いつも俺がいるわけねえし、父親がどうあれおっちゃんはあるたを守る為にここにきてんだ。おっちゃんも信用できねえなら人を頼

るんじゃないよ」

コナンは一呼吸置いた。

「それに脅迫状を出したのあんただよな？」

「え？ どうして!？」

「試したんだろ？ 自分が狙われたら父親はどう行動するか。でもあんたの父親は何もしてくれなかった……むしろそのままの状態で無視をした。ちがうか？」

コナンはポケットに手をつ込みながら前に歩く。あつという間にトイレの前に着いた。その間くるみは一言も何も言わずについてきていた。静まり帰った廊下からやつとくるみから口を開いた。

「そうよ……あれは私が送った脅迫状パパに振り向いて欲しかったのよ。凄いわね。」

コナン君……貴方一体何者なの？」

「江戸川コナン。探偵さ！」

得意気に名乗るコナンに関心しているくるみ。

「でも、ナイフは私が仕掛けた物じゃないわ」

「だろうな。脅迫状を知ってる奴の犯行か調べた奴の犯行」

得意気な顔から真剣な眼差しでくるみを見上げた。目の前にあるトイレに入らずに脇にある非常階段の扉を開け壁にもたれまたポケットに手をつ込んだ。くるみも非常階段の扉を静かに閉めてコナンの前にたった。

「この事知ってるのはパパとママくらいしかないと思う」

「ホントに？ 誰かに相談とかしてない？」

「相談……あ！秘書の高松さん。ママが相談してたわ」

少し大きな声になってしまったくるみにコナンは人差し指を自分の口の前にたたせ静かにするように示した。くるみは慌てて口を両手で抑えた。

「犯人は秘書の高松さんってわけか」

そこで話を一旦辞めて非常階段の扉をあけた。がそこには人影が見えた。

「くるみさん！ 階段上がって！ 早く！！」

「え！？ コナン君も！！」

「俺はいいから早く！」

くるみはコナンに言われた通りに階段を上がった。それを見届けたコナンはその影を睨んだ。

「話し全部きいていたんでしょ？」

かわいらしい子供の声。さっきくるみに叫んだのとは全くの別人。

「ちがいますよ。ただ貴方たちを探しにきただけですよ」

不適に笑う高松。

「探してどうする気？　後ろに隠してある“物”で殺す気？　ばれ
ばれたよ高松さん？」

思いもよらない発言に驚いた高松に今度はコナンが不適に笑った。

「コナンくん！早く来て！！」

叫ぶくるみが上がって顔を出した。

「バカ！！早く階段登れ！！！」

高松から目を反らしたコナンを後ろでもっていた“物”でコナンを
殴った。

「コナン君！！」

その光景をみたくるみが一目散にかけ降りた。

「だから……くんたて……」

意識が朦朧とする中必死で声をしぼり出す。くるみが到達したところ
には高松がコナンを抱えていた。

「ねえ！返して！！コナン君を返して！」

お年頃とは思えない泣き声でくるみは高松に反抗した。

第五話〜犯人登場〜（後書き）

お待たせしました。

学校忙しくて投稿進み具合遅れぎみ。

犯人お出ましです!!

時間有れば後一話今日送るかな。確率35%

では

第六話　暗号

二人お互いににらみ合いが数秒間続いた。

しかし、コナンを助け出す術などみつからなかった。

「くるみさん今から行くところに一緒にきてもらおうよ?」

「ど……に……?」

震えた声と涙声がかさなり少し言葉にならないくるみの声。高松が
かるく“クッククツクツ”と笑う

「鶴の川」

くるみは頷くしかなかった。

「その前に毛利さんたちにうまく話してこい」

トイレで顔を洗い何時もの顔になった。

くるみが小五郎たちのいる部屋に戻った。

「あ!　くるみさん。遅かったじゃない」

「ごめんなさい……コナン君がお腹痛いって言ってたから私の使い
に家まで送り届けました」

「えー!」

蘭は驚きすかさず心配そうな顔になった。

「毛利さんすぐに家に帰ってあげて下さい」

くるみは一礼をした。

「しかしですなあ」

「大丈夫です。また明日伺います。あそうだわ!」

くるみは机の上にあるぺんと紙に何かを書き渡した。

「わたしのアドレスです」

小五郎に紙を渡し背中を押した。

小五郎は不機嫌そうにその場からでていった。

(お願い気付いて)

くるみは祈りながら高松のもとに戻った。

「タクシーの中」

先ほどくるみからもらった紙がきになり紙に目を落とした。少し荒れた字で何か書いていた。

「 help 鶴の川へ

これを見て!

何も無い所こ

んなところ嫌

君がいれば彼

を止められる

助けにきて。

けど遅くならないで

手遅れになるから

初めの字カタカナ

やっぱり平仮名に

くるみより」

「なんだこりゃ」

くるみからもらった紙にいそいで書いた文字があった。それをみりなり、声をあげた。

「どうしたの？ お父さん？」

紙に向かって叫ぶ小五郎に蘭が声にたして読んだ。

「ヘルプ鶴の川へ

これを見て！何もない所、こんなところ嫌、君がいれば彼を止められる、助けにきて。けど遅くならないで、手遅れになるから、初めの字カタカナ、やっぱり平仮名に

くるみよりってくるみさんからの手紙じゃない！しかも、助けにきてってこれくるみさんからSOSじゃない？」

焦りながら小五郎から紙を取り上げた。

「でも最後の文変よね。初めのってとこ」

小五郎に紙を見せて指をさした。

第六話〜暗号〜（後書き）

簡単な暗号ですがどうぞ解いてあげてくださいな

昨日投稿出来なく今日になってしまいました。
お許しを……

では

第七話　理由

小五郎と蘭はタクシーの中で手紙の最後を考え込んでいた。

「探偵事務所着きましたよ」

タクシーの人に言われて車からおりた。

「コナンくんどこ!？」

蘭は事務所内を探したが見当たらなかった。

「お、おい蘭! この文縦に読めるぞ!」

事務所の机に紙とペンをおき何かを書き始めた。
それを蘭に見せた。

「こ、な、ん、く、ん、を、た、す、け、て」――コナン君を
助けてだわ!」

「ああ、そうだ。くるみさんとボウズが危険ってことだ!」

小五郎はすぐにくるみの携帯に電話をかけたがつながらなかった。
その後直ぐに警察に連絡を入れた。

　　〱 鶴の川・地下 〱

真つ暗な場所でふわふわ揺れる灯りの中薄暗く遠くに見えるくるみ
をつつすらしてきた意識の中コナンは目を覚ました。

軽く後ろにくぐられた縄を順序よく解いていく。手がほどけ足をもほどいた。

「くるみさん！」

睡眠薬でも飲まされているのか揺らしても寝息をたてていた。

「ちょっと起きるの早いよコナン君」

振り向いたところに、高松がたっていた。

高松の手には銃が握りしめられていた。

「動くなよ？ 動いたらくるみに当たるぞ」

しかし、素早く高松の方に動こうとしたコナンに一発右足首に命中させた。コナンはよろけその場に手をついた。

「聞き分けの悪い子だな。動くなっていったはずだ」

コナンは高松を睨み付けた。

「あんたがくるみさんを殺す理由ってなんだよ！」

痛みをこらえながら立ち上がった。

「あんたはくるみさんが出した脅迫状のこと知ってたんだろ？」

「そうだよ。母親からきいてたし、その前にくるみさんから相談うけとからな」

「それでなぜくるみさんを狙う！？」

「くるみさんが願ってたことだろ」

睨みあいが続く中高松は不気味に笑う。

「くるみさんが願ったのは父親に振り向いて欲しいってことだ」

「殺せば振り向いてくれると思うよ？」

「何！？」

「俺は死んでほしくない娘を無くしたんだ！くるみの父親にひき逃げされた！！」

高松の瞳から涙が溢れ出した。

「あの人は誰も死んでも悲しまない。お金にだけ愛をそそぐやつだ。そんな奴に娘を育てる資格なんてない。くるみさんが死んでも何食わぬ顔で一生暮らすことなど分かりきってる！」

「ちがう！！」

反論しようと力強く前に出たと同時に肩に弾がそれた。

「くるな！！ おまえも死にてえのか！！」

拳銃をコナンの胸へとセットした。しかしコナンは引き下がるでもなく左手で肩を押さえて高松を睨みつけた。

「殺してえなら殺せよ！でもな、自分の娘がひき逃げにあつたんなら、証拠つかんで警察に提出しろよ！こんな復讐まがいなことしてんじゃねえよ！自分の娘が喜ぶとも思ってたんのか？くるみさんを殺してそれで喜ぶと思ってたんのか？ちげえだろ！ひき逃

げが、くるみさんの父親だってわかった時に警察に行くべきだろ！
？ その方が娘さんにとって一番の嬉しさだよ！ 今、くるみさん
を殺せばあんたはくるみさんの父親と同罪だ」

コナンの言葉に高松は泣き崩れた。

「なあ自首しなよ」

コナンは座り込んでいる高松に優しい眼差しを向けた。が、高松は
小さく首をふった。

「無理だよ。ここはもうすぐ川の水が満タンになる……みんな溺れ
死ぬ……」

高松の言葉とほぼ同時に水が入ってきた。

第七話〜理由〜（後書き）

遅くなりました。

忙しくてなかなかこれませんでした。

暗号解読……

って暗号なのかな？

簡単でしたね！

6月16日のコナン、オープニング決定！

倉木麻衣さんの「一秒ごとに love for you」

エンディング未定。

では

第八話　脱出への道

止まることなく水はどんどん流れ込んできた。

「くるみさん！おきてくるみさん！」

コナンは必死でくるみをおこそうとした。

「じゃあね。コナン君」

「何！？」

背後から高松はコナンに薬をかがせた。

「……………」

コナンは体の力がぬけるようにその場に倒れ込んだ。高松はコナンを壁に凭れさせそのまま立ち去った。

「あぶねえ」

コナンは少しだけ薬をかいだ後気を失うふりをした。が、体が思うように動かなかった。それでも必死にくるみを起こしつづけた。もう水はコナンの膝までつかっていた。そしてやっとなるみは目をさ

ました。

「良かった……くるみさん大丈夫!？」

「ええ……それよりここはどこなの？」

「ごめん……俺にもわからないんだ。水が入ってきてるってことは
どっかの地下だとおもう」

「そう。多分鶴の川の近くだと思うわ」

「鶴の川？」

コナンは真剣に聞き返した。話す間も出口に出るかもしれない薄暗い道を時計型ライト一つで進み続けた。

「ええ。家からそう遠くないところにあるの」

「そっか。その川の水かもしれないねえってわけか」

「そう。それより肩見せて？」

「へ？」

真剣な話しかから一気に逸れたことに気の抜けた言葉が出た。

「血がでてるから」

「いいよ。別に!そんなに痛くねえから」

そのまま前に進もうとするコナンの腕をくるみがつがんだ。

「ダメよ。　その怪我私のせいなんでしょ？」

「違うよ？　勝手に逆らったのは俺。くるみさんは悪くないから。それにもう止まってるから。進もうくるみさん？」

コナンは左手で右肩を触りくるみに微笑んだ。

そしてまた進み始めた。静かに暗闇を歩いていく。道は一本道、迷いなく前に前に進んだ。水はいつしか止まり始めていた。五月といえど長時間水の中はきついものだった。

そして、肩の傷より足にあたった傷のせいで額からは汗がつつた。水の中のため止まることなど無かった。しかしくるみを困らせないようにするため元気にふるまった。

歩き歩いた先にみえたのは行き止まりだった。

第八話　脱出への道（後書き）

長らくお待たせしました！

って、待っててくれた方々いたのだろうか……

まあ組織でもない恋愛でもない話しに目を輝かせる方々すくなくないですよね。

でも、いらっしゃるかた本当に嬉しいです。こんな不評な作品をよんで下さる方ありがとうございます。

第九話　脱出

　　〱 鶴の川 〱

小五郎と蘭、警察とで川の周りを調べ歩き回った。

「ねえ、お父さんコナン君たちいた？」

蘭が心配そうに小五郎を見る。

「いや。何処にもいねえよ」

「そう……」

蘭の顔が一気に曇っていくのがみえた。

「だー！ー！！見付けてやるから、んな顔してんじゃねえよ！ほら探すぞー！！」

ぶつきらぼくに励ます小五郎に、少し笑顔をとりもどした蘭が頷いた。

（あのボウズ、探偵なら少しは手がかりのこしとけての！おまがいねえと蘭が蘭じゃなくなるんだ。わかってんのか？）

小五郎はひたすら手がかりを探した。

蘭は小五郎から少しはなれ森へ森へと進んだ。

行き止まりに差し掛かり自分たちが地下にいることを改めて理解した。

（どこだ？ どっかに出口に関係あるものがあるはずだ。高橋はどこから出入りしたんだ？）

コナンは周りを見渡す時計型ライトでくまなくさがす。

「ねえくるみさん！壁に何かあるか調べて！」

「ええ、わかったわ！」

地下というもので酸素も薄い。いくら水が止まったからと言え下半身が漬かった状態では何れは凍死か酸欠で死ぬ運命だった。そしていつ二次災害がおきるかも分からなかった。ひたすら二人は壁をしらべた。

「コナン君！！」

くるみは自分の目線より少し高い位置にある物をしめした。

「まさか！」

コナンはその周りを調べ始めた。
自ら溜まった水の中に手をつ込む。

（これが！）

コナンは手に触れた物を掴みあげた。

「ロープ？」

「そう、これが上からつられていたんだ。多分高橋さんがね。」

そこに出てきたものは真新しいロープ。

くるみは上を見上げ不安な顔になる。

「ね……私たちどうなるの？ 死んじゃうの？」

徐々に涙がわき出てくるくるみと裏腹にコナンは笑みを浮かべた。

「大丈夫。ここに梯子が備え付けてあるから」

コナンは少し歩き梯子に手を軽く叩いた。

「多分高橋さんしらなかったんだよ。梯子があること」

そう言いながらくるみにボタンを押すのを促した。

くるみはボタンを強く押した。

ガガッと上の方から音を出して開いていく。その光景を少し離れた場所から二人は見た。

「よし！ いこ。くるみさん」

くるみを先頭に二人は梯子を上りはじめた。

第九話「脱出」(後書き)

長らくお待ちしました。

凄くゆっくりペースをお許し下さい。

今日で脱出です！

次は地上で……

おっちゃんってあんな感じにコナンを心配するのかな。作者自身ではしてそうなきがするんですが……

6月16日エンディング決定

上木彩矢“summer memorys”です

マトメ

6月16日からのコナンのオープニングは

倉木麻衣“一秒ごとにlove for you”

エンディング

上木彩矢

“summer memorys”

ちなみに監督さんが

於地紘地監督にかかります！

第十話　悪魔に勝つ天使

梯子を登るのも数分眩し光の中くるみが出た。続いてコナンも登りきった。息を整えているのもつかのまコナンはすごい力で中に浮いた。

その光景を驚きながらくるみは見上げた。

そこにいたのはコナンを抱えた高橋だった。

「コナン君を離して！！関係ないじゃない！」

「すみませんね。でもこのぼうやは知りすぎています」

「でも、まだ子供だよ！小学生に理解力ないわ。だからお願い！」

「では、くるみさんがその穴に落ちればぼうやを助けてあげる」

高橋はコナンを持つ反対の手で先ほど登ってきた穴に指をさした。

「ほんとに返してくれるの？」

「ええ約束します」

くるみは少しづつ前に進んだ

「駄目だよ……くるみさん。こんな人の言うこと聞いちゃ……う……」

高橋が最後まで言いかけたコナンの首を締める。
その時高橋の顔に誰かの足が当たった。

「ぐあ……」

高橋が奇妙な声と共に倒れた。その弾みでコナンが投げ飛ばされた。

「コナン君！」

間一髪でくるみがキャッチした。

そのままくるみは尻餅をつき危うく穴に落ちそうになった。

そして落ち着いた光景を二人はみた。

「蘭さん！」

「蘭ねえちゃん！」

二人が驚く先には蘭が立っていた。

「どうしてここに？」

「森の中コナン君たち探してたらくるみさんの必死な声聞こえて来てみたら、高橋さんがコナン君を捕まえてたから後ろから回し蹴りをしたのよ」

蘭は伸びきってる高橋を睨んだ。

「でも、二人共何とも見つかった良かった」

蘭は胸を撫で下ろした。

「はい。あ、それから救急車呼んでください。コナン君怪我してるみたいだから」

蘭の前にコナンが驚いた。

「足……見てたらわかるよ……。ずっと隠してたでしょ？」

「か、隠してなんかないよ！」

両手をふり弁解してみるが逆に二人から睨まれた。

「コナン君？　またムチャしたのね？　ほら」

蘭は少し怒りながらも背中を向けコナンの前にしゃがんだ。

「いいよ！　僕歩けるから」

「いいから乗りなさい」

「ほら！　照れない照れない」

くるみがコナンの背中をそつとおした。コナンは赤くなりながら蘭の背中に乗った。

「おーーい」

遠くから小五郎や警部が走ってきた。

「お父さん！　犯人高橋さんだったの」

近づいてきた小五郎に蘭が説明した。そして伸びている高橋を起し連行された。

第十話　悪魔に勝つ天使（後書き）

お待たせしました！

今回

悪魔　高橋

天使　蘭

です

蘭の回し蹴り炸裂

痛そう……

蘭来てなかったらくるみもコナンもどうなってたか……

まあ

麻醉銃で眠らされてたかな、高橋。

そうだ。

くるみさんって蘭と同級生なんだって設定では。

次回最終話だったとおもいます。

最終話〜平和〜

その後レッドアップルジュエリー株式会社は何事なくオープンされた。

蘭とコナンはそのジュエリー店に足を運んだ。

「蘭さん！コナンくん！」

くるみは手をブンブン振りながら二人を向かえてくれた。

「コナン君、蘭さん。私ねずっとお礼言って無かったね。先日助けてくれてありがとう。」

くるみは深々と礼をした。

「そんな、顔上げてください。私たいしたことしてませんよ！」

「そんなことはありません」

くるみはコナンと蘭に一つの包みを渡した。

「くるみさん？これは？」

蘭は目を丸くしてくるみを見た。

「助けてくれたお礼です。蘭とコナン同じペンダントです」

ニコニコしながら“開けて見て”っと二人を促した。

「わあ。これあの時のペンダントじゃない？」

「そうよ事件が起きる前に蘭さんに選んであげたペンダント。気に入ってもらえると嬉しいわ」

「ありがとうございます」

蘭は喜んで、ペンダントを首につけた。

コナンは微笑ましく二人をみやげていた。

それに気付いたくるみはしゃがみこみ耳元で囁いた。

「大きくなったら着けるのよ」

くるみが立ち上がりまた蘭と二人で話してるなかコナンは顔を赤らめていた。

く 帰り道く

蘭とコナンは夕日をバックに歩いていた。

「くるみさん元気だったね！」

「そだね！ お父さんと仲直りしたみたいだね」

「それでコナンは？」

「え？」

「“え？”じゃないわよ。怪我よ怪我」

「大丈夫だよ！ 大袈裟な怪我じゃなかったしね」

ニコニコながら蘭を見上げた。

最終話〜平和〜（後書き）

ありがとうございました！
無事終わりました。

白石早苗先生、田中麻奈先生、曖華先生、空色力エデ先生、北野文
萌様

評価感想ありがとうございます。
とてもはげみになりました。

今回は恋愛の一切入っていないただの事件でした。
これからもよろしくお願いします。

まだまだ評価感想受付中（笑）

お知らせ！

1、やっと来週テレビコナン始まりです
6月16日（月）「505話・弁護士妃弁護士の証言（前編）」

2、6月15日から6月29日（30日）休みます。

理由：実習があるので。

あと、他の小説の事で少し考えることがあるので。

30日出来れば短編小説を投稿する予定。
（7月に会えるかは未定。）

以上。

では、またいつか会う日まで

2008年6月12日

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2548e/>

レッドアップル

2010年10月9日04時32分発行